

# 月刊 ウィーン

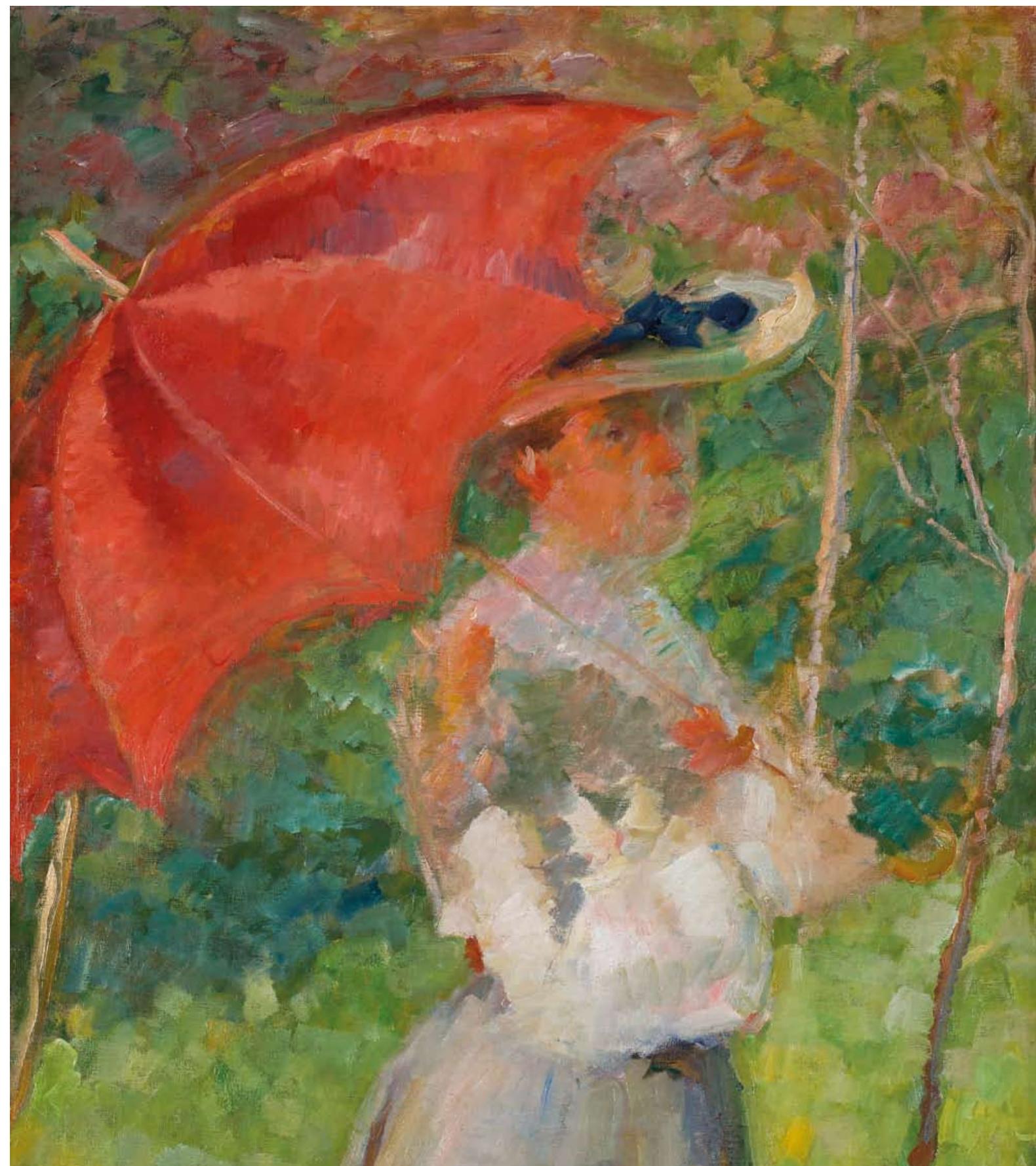
# GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で  
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊 37 年目 **Nr. 420**

**2025 年 3 月号**



# 杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都

我が国における産業界、大学等の教育機関、研究機関及び国など全ての関係機関において原子力エネルギー基盤及び今後の原子力ビジネスを支える人材の育成に積極的に取り組むため、二〇一〇年一月に「原子力人材育成ネットワーク」が設立された。現在、産業界、学術界、地方自治体および各省庁の八四機関が参加している。日本原子力研究開発機構、日本原子力産業協会及び原子力国際協力センターが共同事務局を務めている。同ネットワークの主催により毎年シンポジウムが開催されており、今年度は、二月一日に日比谷国際コンファレンススクエアで開催された。参加者は、対面参加が五一名、オンライン参加が九五名の計一四六名であった。



午前中は、同ネットワークの運営委員会委員長である増井日本原子力産業協会会長からの開会挨拶に続いて、事務局長である中野日本原子力研究開発機構原子力人材育成センター長によるネットワークの活動状況の報告の後、原子力分野における人材育成に資するデータ収集と分析として三件の発表があった。最初は、日本原子力文化財団企画部の永田氏より「原子力に関する世論調査（二〇二三年度）の結果と調査結果を踏まえた次世代層への情報発信方法」と題する報告があった。続いて、日本原子力産業協会人材育成部の藤原氏より、「原子力関連学科・専攻の学生動向ならびに原子力関連企業・機関の採用状況の調査」と題する報告があった。午前最後の発表には、日本原子力産業地域交流部の澤木氏より「原子力発電に係る産業動向調査二〇二四（二〇二三年度対象調査）」と題する報告があった。

午後には、魅力発信の実例紹介として三件の発表があった。最初は、土木技術者女性の副会長で J R 西

日本コンサルタンツ（株）の深瀬氏より、「未来のロボシヨを求めて」土木技術者女性の会の取組」と題する報告があった。続いて、宇宙航空研究開発機構広報部の宮里氏より「JAXAの広報活動」と題する報告があった。最後に、福島工業高等学校副校長の鈴木氏より「廃炉ロボコンを通じた地域貢献」と題する報告があった。シンポジウムの最後には、日本原子力研究開発機構の門馬理事より閉会の挨拶が述べられた。各発表に対して、フロアおよびオンラインからも概して活発な質疑応答があった。特に、今回初めて原子力以外の分野から、魅力発信の実例を紹介してもらったことで、原子力分野の参加者にとっては大いに参考になったと思う。ウクライナ戦争以降、内外で原子力の役割が見直されていることから、原子力分野でも原子力の魅力を機関横断的に強く発信してゆくことが必須であり、そのため本ネットワークの役割が今後益々問われていると感じた。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両地に生きている動物（その八）を紹介したい。ウィーンのシェーンブルン宮殿やプラター公園周辺、農地、郊外の森ではカラスの群れをよく見かける。種類の異なるカラスは、体長約四五センチでくちばしの根元が白っぽく、成熟すると顔の羽毛が抜ける特徴を有するフードガラス（ミヤマガラス）と体長約六〇センチとカラスの中でも最大級のワタリガラスの二種類がある。フードガラスは、群れで行動することが多く、特に冬には大きな群れを形成しウィーンの冬の風物詩となっている。交通量の多い道路でクルミを落とすに割らせる行動が報告されており、都市環境に適応している。ワタリガラスは、低く響く声で鳴き、単独またはペアで行動することが多く、縄張り意識が強い。高度な知能を持ち、道具を使う行動が報告されている。また、食べ物を貯蔵し、後で取り出す習性がある。いずれも冬になると東欧やロシアから渡ってくる個体が増える。

ヨロツバでは、カラスは知恵を持つ鳥として認識される一方で、不吉の象徴ともされている。その背景には聖書や神話、民間伝承が深く関わっている。一方、京都では、体長約五〇センチでくちばしが太く、額が丸みを帯びているハシブトガラスと体長約四七センチとくちばしが細く、額がなだらかなハシボソガラスの二種類がある。ハシブトガラスは、「カーカーカー」と太く低い声で鳴き、比較的森林に近い環境を好むが、主に都市部（神社仏閣、公園、市街地の街路樹）に多い。人の生活圏に密着しており、ゴミ置き場や観光地の食べ残しを狙う。清水寺や八坂神社の周辺、鴨川沿いの緑地などでよく見られる。ハシボソガラスは、「ガーガー」と濁った声で鳴き、開けた場所（河川敷、農地、郊外の公園など）を好み、低めの木や電柱などにも巣を作る。農地の周辺では昆虫や穀物なども食べるため、畦畔野や桂川沿いのエリアでよく見かける。神武天皇が東征の途中、熊野の山中で道に迷った際、高天原から遣わされた八咫鳥（やたがらす）が彼を導き、大和へと無事に辿り着くことができた。これにより、八咫鳥は「導きの神の使い」として尊ばれ、熊野神社の神使とされている。日本サッカー協会のシンボルマークにも採用され「正しい方向へ導く」象徴として知られている。

余談であるが、筆者は原子力人材育成ネットワークの初代事務局長を務めた。今回のシンポジウムでは午前午後各一回質問して少しは盛会に協力した。ウィーン在住時は、プラター公園内でよくカラスを目撃した。今にして思えば都市環境に適応しているフードガラスだろ。京都でも東山周辺の神社仏閣でカラスを見かけたが、ハシブトガラスだと思っ。今月も両地に生きている動物を紹介することができた幸運に感謝しつつ、掲載させていただく。



■ 杉本純 元京都大学教授  
元原子力機構ウィーン事務所長 ■



© Daniel Zupanc



© GEKKAN-WIEN